

【資料紹介】 マイト美智子氏のゲオルグ・デ・ラランデ資料の収集について —長女ウルズラ氏からの手紙を中心に—

早 川 典 子*

目 次

- 1 はじめに
- 2 デ・ラランデ研究史
- 3 マイト美智子氏による調査
- 4 おわりに

キーワード ゲオルグ・デ・ラランデ 旧トーマス住宅 三島邸

1 はじめに

1977年10月から1978年4月まで放映されたNHKの朝の連続テレビ小説は『風見鶏』という作品で、作品の舞台は神戸市の北野であった。異人館が建ち並ぶ北野のようすは、全国的に知られるようになったという。この作品の異人館の象徴としてゲオルグ・デ・ラランデが設計した住宅「旧トーマス住宅」が使われていた。

「旧トーマス住宅」は、1978年1月に国の重要文化財に指定された。さらに、異人館が数多く残る神戸市北野町山本通は、1980年（昭和55）に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。これは当時、神戸市職員であった坂本勝比古によるところが大きい。彼はこの住宅をはじめ北野の異人館保存に尽力した。坂本勝比古は、1926年中国・青島生まれ。かつてドイツ領だった街で、「西洋館に暮らして育った。自分の原点」と周囲に語っていたという。神戸工業専門学校（現：神戸大工学部）を出て、1949年に神戸市職員になり、「異人館」の研究に取り組んだ。当時「異人館」は文化財としての価値は認められていなかったと語っている¹⁾。のちに神戸市役所を退職し、千葉大教授、神戸芸術工科大教授を歴任、2020年2月15日に93歳で没した。

江戸東京たてもの園に移築された「デ・ラランデ邸」は、現存する数少ないデ・ラランデの建物である。この洋館を解体・復元する際、坂本勝比古を始め、先行研究の研究成果を多く活用している。前稿「【資料紹介】デ・ラランデ邸（旧三島邸）の工事過程で発見された資料について」（『東京都江戸東京博物館紀要』14号、東京都江戸東京博物館、2024年）にて紹介した江戸東京たてもの園に多くの資料を提

*江戸東京たてもの園学芸員

供したマイト美智子氏が、ドイツでデ・ラランデについて調べるようになったのは、坂本勝比古から当時、ドイツ在住のマイト美智子氏に対してデ・ラランデについて調べてほしいと依頼を受けたことがきっかけだったという。デ・ラランデ研究に大きな功績があるマイト美智子氏は、ドイツ在住であったため、日本の研究史にはあまり出てこない。本稿では、マイト美智子氏によるゲオルグ・デ・ラランデに関する調査の功績を紹介するとともに、デ・ラランデ研究の黎明期を振り返ることを目的とする。

2 デ・ラランデ研究史

①坂本勝比古

1960年ころから日本各地の居留地の建物に関する論考を日本建築学会に発表している²⁾。中でも、デ・ラランデについて言及があるのは、『明治の異人館』（朝日新聞社、1965年）第4章「神戸の居留地と異人館」において、デ・ラランデ設計のオリエンタルホテルを紹介している。また、江戸東京博物館において2007年に開催した講演会の講演録として「ドイツ人建築家G. デ・ラランデとその周辺」（『東京都江戸東京博物館研究報告』13号、東京都江戸東京博物館、2007年）もあげられる。

②長谷川堯

建築史家、建築評論家の長谷川堯は、「日本の表現派(上)～大正建築への一つの視点～」(『近代建築』、近代建築社、1968年)の中で、「住宅 設計／ゲラランダー 東京・信濃町」と建物の外観を紹介している。これは明治～大正期の建築系の雑誌に掲載されて以降、関東大震災、東京大空襲を経て現存している東京都内の西洋館として最も早い事例と思われる。

③菊池重郎

東海大学教授・建築史家菊池重郎は、「在日外人建築家ゲー・デ・ラランドの旧宅」（『建築界』、理工図書、1971年）の中で、明治後期の建築系雑誌記事を紹介。建物の竣工時期については、雑誌『建築畫報』（1912年7月号、p.3）の記事を基に1912年6月以前と指摘している。

④堀勇良

当時横浜市職員であった堀勇良は、「ユーгентシュティルの波」（『日本の建築 明治大正昭和 10 日本のモダニズム』、三省堂、1981年）の中で、「旧デ・ラランデ邸（現三島邸） 設計：デ・ラランデ 竣工：1910年（明治43）頃」と紹介。また、『日本の美術447 外国人建築家の系譜』（至文堂、2003年）では、デ・ラランデが日本にユーгентシュティルを持ち込んだドイツ人建築家として紹介している³⁾。さらに、前述した講演会の講演録である「ドイツから影響を受けた日本人建築家たち」（『東京都江戸東京博物館研究報告』13号、東京都江戸東京博物館、2007年）、最新のものでは、『日本近代建築人名総覧』（中央公論新社、2021年、P.883）の中で、「デラランデ」項を執筆している。

⑤藤森照信

建築史家藤森照信の「西洋館は国電3分 鏡子の家」（『建築探偵の冒険 東京篇』、筑摩書房、1986年）によって、デ・ラランデ邸（旧三島邸）が一般に広く知られるきっかけとなった。マイト美智子氏が「マイト美智子博士」として文中に登場し、マイト美智子氏がデ・ラランデ長女のウルズラ氏から入手した、

デ・ラランデ邸の室内写真2点を紹介している。この入手の経緯は第3章にて後述する。

⑥堀内正昭

昭和女子大学教授の堀内正昭は、前述した講演会の講演録である「日本に影響を与えたドイツ人建築家たち」（『東京都江戸東京博物館研究報告』13号、東京都江戸東京博物館、2007年）のほか、「ドイツ東洋文化研究協会（OAG）に所属した来日ドイツ人建築家たち」（『日本建築学会関東支部研究報告集』、2008年）にてデ・ラランデに触れている。

⑦青木祐介

横浜都市発展記念館学芸員の青木祐介は、デ・ラランデ事務所の製図掛であった臼井泰治氏の息子・臼井齊氏から寄贈された資料をもとに2009年4月には『開港150周年記念 横浜建築家列伝』（2009年4月25日～8月30日 会場：横浜都市発展記念館）という展覧会を担当した。横浜にあったデ・ラランデ設計の住宅「ポール邸」の青焼き図面と、横浜時代のデ・ラランデ事務所の所員を撮影した写真が紹介された。展覧会の成果をふまえて、『横浜都市発展記念館紀要』第7号（2011年、p.1-24）において「建築家デ・ラランデと横浜」をまとめている。また、2018年11月から佐倉市立美術館で開催された『知られざるドイツ建築の継承者 矢部又吉と佐倉の近代建築』（2018年11月3日～12月24日 会場：佐倉市立美術館）という展覧会の展示図録において「最後の「ドイツ派」建築家矢部又吉」（『知られざるドイツ建築の継承者展図録』、2018年、p.5-12）という論考を寄せ、デ・ラランデの業績にも触れている。

⑧広瀬毅彦

兵庫県出身の広瀬毅彦が、「旧トーマス住宅」に居住していた家族の子孫をドイツで訪ね、竣工時の資料を発見、それを紹介したのが『風見鶏 謎解きの旅』（神戸新聞総合出版センター、2009年）である。また、デ・ラランデの故郷であり、現在はポーランド領であるヒルシュベルグにて調査を行い、日本に来日する前の設計活動についても紹介しているのが『ロイヤルアーキテクト ゲオルグ・デラランデ新発見作品集 既視感（デジャヴ）の街へ』（edition winterwork、2012年）である。

⑨田井玲子

神戸市立博物館学芸員の田井玲子は、神戸の居留地の歴史を1冊にまとめた『外国人居留地と神戸』（神戸新聞総合出版センター、2013年）「デ・ラランデと神戸」という項で神戸にあるデ・ラランデ作品について触れている。

3 マイト美智子による調査

マイト美智子氏は、上智大学外国語学部イスパニア語学科卒業後、ドイツに渡り、ケルン大学にて西洋美術史を専攻。学位論文「1542年以降、ヨーロッパ及び北アメリカ建築の日本への導入過程」にて1977年に博士号を取得した。その後、居留地や異人館についての研究をしていた坂本勝比古から「旧トーマス住宅」を設計した建築家、ゲオルク・デ・ラランデの経歴について、ドイツで調べられないかとの依頼を受けた⁴⁾。その後、ドイツにおいてデ・ラランデについての調査する中で、デ・ラランデの長女であるウルズラ・シュルツ（Ursula Schulz）（旧姓デ・ラランデ）氏の住所を入手し、まずはご自身の

著作とともにお手紙を送り、その後、1981年1月25日、ミュンヘン郊外にあるガウティングの自宅を訪問した。当時74歳のウルズラ氏はご主人の退役大佐ハインリッヒ・シュルツ（Heinrich Schulz）氏（76歳）と二人暮らし。この日に撮影されたのが【写真1-1・2】の2点である。

デ・ラランデには、4人の娘と末っ子の息子がいたが、息子のギド氏は、第二次世界大戦で亡くなっている。また、次女のオットー氏は1956年に49歳、三女のユキ氏は1963年に54歳で亡くなり、当時存命していたのはウルズラ氏と四女のハイディ氏のみである。

この訪問時、マイト美智子氏は、ウルズラ氏が所有していた11枚の写真を複写のため借用し、代わりに、日本において坂本勝比古が入手していた写真の複写を3枚見せた。どれもウルズラ氏の手元にはなかったものだったという。坂本が日本で入手していた3枚とは、「ゲオルク・デ・ラランデの石膏の胸像」、亀岡宗筆の油絵「D家の人々」⁵⁾、軽井沢の別荘で撮影されたという「デ・ラランデの3人の娘」が写った写真であった。これらは、デ・ラランデ事務所の所員が保管していたものだという【写真2・3・4】。

その後、ウルズラ氏が妹のハイディ氏がもっていたデ・ラランデのポートレートを手に入れている【写真5】。



【写真1-1】ウルズラ・シュルツ氏とハインリッヒ・シュルツ氏 1981年1月25日 マイト美智子氏撮影



【写真1-2】ウルズラ・シュルツ氏と愛犬ドリー 1981年1月25日 マイト美智子氏撮影



【写真2】「ゲオルク・デ・ラランデの石膏の胸像」坂本勝比古の調査による



【写真3】亀岡宗筆の油絵「D家の人々」坂本勝比古の調査による



【写真4】軽井沢の別荘で撮影されたという「デ・ラランデの3人の娘」坂本勝比古の調査による

以下、ウルズラ氏よりマイト美智子氏に届いた手紙の概要を【表1】に示す。なお、これらの手紙についてマイト美智子氏は、ドイツ語の書簡の全文を書き起こし、日本語訳も作成の上、江戸東京たても園に提供して下さった【表1】【表2】。












手紙No.2のデ・ラランデのポートレートについては、『日清朝土木建築業者信用録 第1版』にも使われている写真である【写真5】【写真6】⁶⁾。

手紙No.5では、「東郷いせ」という人名が出てくる。デ・ラランデの妻エディータはデ・ラランデの死後、5人の子どもを連れて1914年～15年にかけてドイツに帰国している。日本語に堪能だったことが縁で、1919年にはドイツの日本大使館での仕事を得た。そして、外交官としてドイツに赴任した東郷茂徳と1921年に再婚する。その間に生まれた娘が東郷いせ氏で、ウルズラ氏とは異父妹にあたる。この手

【表1】ウルズラ・シュルツ氏からの手紙一覧

手紙番号	手紙の日付	手紙の概要
1	1980年9月21日	あなたの著書を興味深く読んでいます。わたしの愛する父は、有能な建築家でしたが、あまりに早く41歳で亡くなりました。クルト・マイスナーは、わたしの叔父です。わたしは横浜で生まれました。
—	(1981年1月25日)	マイト美智子さんがウルズラさん宅を訪ねる。写真11枚を預かる。【表2】参照
2	1981年2月21日	2月11日付けのお手紙ありがとうございます。 わたしの妹のハイディが持っていた、父の写真を同封しますので、使ってください。わたしにも複写をお願いします。あなたがわたしたちを訪問して下さったことを楽しく思い出しています。父の写 ^ず 真は、できるだけ早く送り返してください。残念ながら、わたしたち夫婦は健康が優 ^{すぐ} れませんので、多くのことをすることができません。
3	1981年3月7日	写真の複写をお送りくださり、心から感謝いたします。 送って下さった絵画を撮った写真は、わたしたち4人姉妹と、2人の夫人です。この夫人たちはわたしの母と、ヴィルヘルム夫人です。
4	1981年4月2日	わたしが見たことない写真をお送りくださりありがとうございました。心からの感謝をいたします。
5	1981年12月19日	あなたの故郷のカードでクリスマスと新年のお祝いをお送りします。10月に東郷いせがドイツに会いに来てくれて、日本のカードをもって来てくれました。 わたしたち夫婦は、体調がよくないのでクリスマスの祝日を自宅でくつろいで過ごす予定です。
6	1982年4月6日	長い間、ご無沙汰してしまって申し訳ありません。2月に美しいカレンダーとお手紙をありがとうございました。わたしの体調はあまりよくありません。イースターのお祝いを。
7	1982年12月17日	クリスマスと新年を楽しく過ごしますように。我が家の愛犬ドリーは13歳になりました。夫とわたしは78歳と76歳です。
8	1983年1月18日	日本からの素敵なカレンダーありがとうございました。わたしはあまり元気ではありません。手紙を書くこともつらいのです。みなさんの健康を祈ります。
9	1983年12月21日	クリスマスと新年のお祝いを申し上げます。8月に愛犬のドリーを重い疾患のために失いました。わたしも歩行が困難で補助が必要です。手がふるえて文字を書くのもつらいです。あなたが以前撮ってくれた愛犬との写真をうれしくながめています。
10	1985年4月	生と死をつかさどる主なる神はわたしの愛する妻、わたしたちの良き姉、義姉、叔母を長い間忍耐強く勇敢に耐えた苦しみから解放して御許に召されました ウルズラ シュルツ 旧姓デ ラランデ ハインリッヒ シュルツ

【表2】ウルズラ・ショルツ氏所蔵写真の一覧

写真 番号	画像	写真の概要	写真 番号	画像	写真の概要
1		Georg de Lalande と Edith Pitschhe 結婚記念写真 1905年7月5日 (Ursula Schulz de Lalande所蔵)	7		Hirschberg (ヒルシュベルグ) デ・ラランデの生家 No. 1 (Ursula Schulz de Lalande所蔵)
2		ウルズラ誕生通知カード 1906年8月10日 横浜根岸 デ・ラランデがデザインしたカード (Ursula Schulz de Lalande所蔵)	8		Hirschberg (ヒルシュベルグ) デ・ラランデの生家 No. 2 (Ursula Schulz de Lalande所蔵)
3		デ・ラランデ家の4人姉妹 (東京にて) (中央の男の子は遊び友達) (Ursula Schulz de Lalande所蔵)	9		Hirschberg (ヒルシュベルグ) デ・ラランデの生家 Nr. 3 表通りから (Brigitte von Kienitz 旧姓 de Lalande, Georgの弟Guidoの娘さ ん所蔵)
4		デ・ラランデ家の4人姉妹 信濃町の自宅バルコニーにて (Ursula Schulz de Lalande所蔵)	10		Hirschberg (ヒルシュベルグ) デ・ラランデの生家の前で Georgの弟Guidoと2人の妹Minni とMargarete (Brigitte von Kienitz 旧姓 de Lalande所蔵)
5		信濃町自宅の内部：食堂 (Ursula Schulz de Lalande所蔵)	11		馬上の一番左が弟のギド、その隣： 妹のひとり？右の二人は不明 (Brigitte von Kienitz 旧姓 de Lalande所蔵)
6		信濃町自宅の内部：サロン (Ursula Schulz de Lalande所蔵)			

紙から彼らの間で交流があったことがうかがえる。

それから、ウルズラ氏の体調の変化とともに、手紙の頻度が減り、最後の手紙No.10はウルズラ氏の死亡通知となっている【写真7～12】。

ウルズラ氏が12歳でドイツに帰国したあと、「日本に再来日する機会があったのかどうかの答えはもらえなかった」とマイト美智子氏は書いている⁷⁾。しかし、幼いころに過ごしたデ・ラランデ邸のそばで、ぜひこの手紙を保管してほしいとの意向で、今回これらのウルズラ氏直筆の手紙10通の提供を受けることとした。

4 おわりに

デ・ラランデについて最初に注目した坂本勝比古からは、江戸東京たてもの園でのデ・ラランデ邸復元にあたり、たびたびお手紙も頂戴し、気に



【写真5】四女ハイディが持っていたデ・ラランデのポートレート



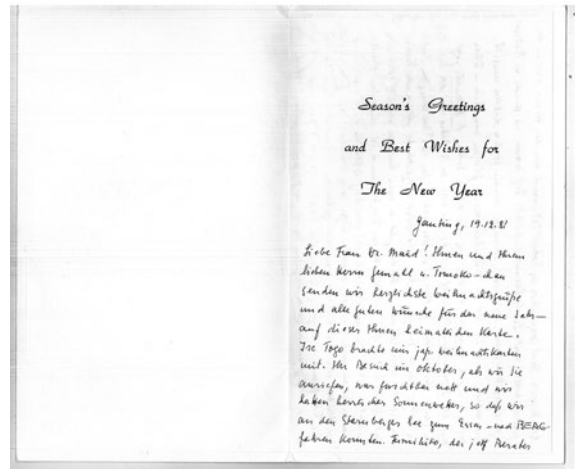
【写真6】『日清朝土木建築業者信用録』第1版 デ・ラランデ項



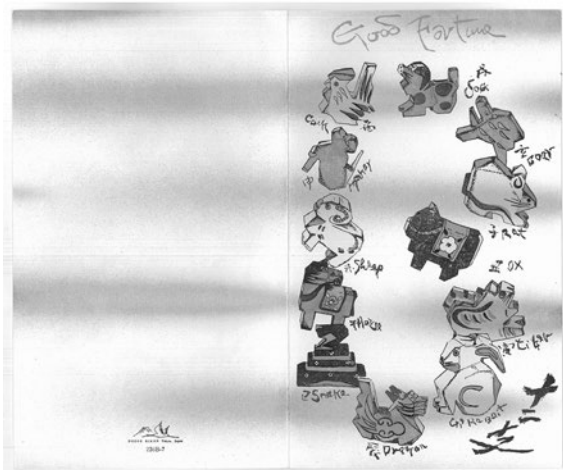
【写真7】ウルズラ氏からの最初の絵葉書 No. 1



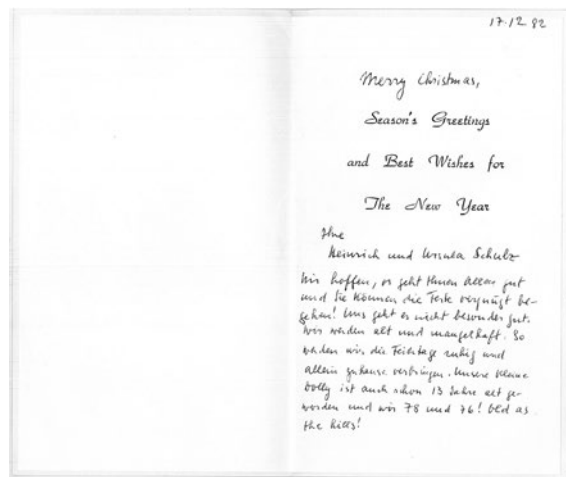
【写真8】ウルズラ氏からの手紙 No.5 クリスマスカード



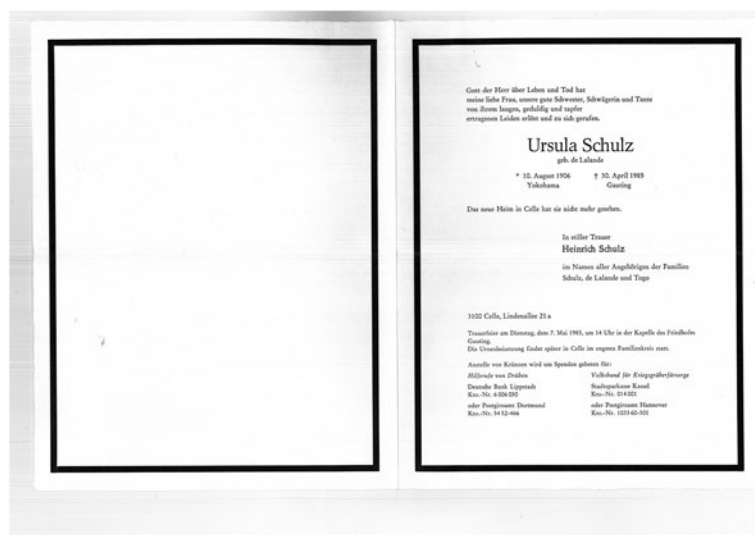
【写真9】ウルズラ氏からの手紙 No.5 文面



【写真10】ウルズラ氏からの手紙 No.7 クリスマスカード



【写真11】ウルズラ氏からの手紙 No.7 文面



【写真12】ウルズラ・シュルツ氏死亡通知

かけていただいたことを懐かしく思い出す。今回、江戸東京たてもの園にご提供いただいたウルズラ氏からの手紙について、マイト美智子氏は、「ウルズラさんが幼少期を過ごしたこの家に、せめてお手紙だけでも返してあげたい」と語っておられた。その思いを引き継いでいきたい。

デ・ラランデ研究の黎明期を振り返りながら、これらの先行研究のおかげで、たてもの園のデ・ラランデ邸内の展示が充実したことに心から感謝する。

【註】

- 1) 2020年2月21日付朝日新聞ウェブ版記事より。
- 2) 「神戸居留地成立過程と現存する一洋館について」(『日本建築学会論文報告集』、1960年、p.613-616)。
- 3) 「ドイツの新しい波ユーゲントシュティル」(『日本の美術447 外国人建築家の系譜』、至文堂、2003年、p.64-67)。
- 4) 「ゲオルク・デ・ラランデとの二度目の出会い」(『江戸東京たてもの園だより第43号』、2014年)。
- 5) 二科展第二回出品(会期:1915年10月13日から26日 会場:日本橋三越呉服店旧館3階)。

【資料紹介】 マイト美智子氏のゲオルグ・デ・ラランデ資料の収集について—長女ウルズラ氏からの手紙を中心に—（早川典子）

6) 『日清朝土木建築業者信用録 第1版』（発行兼編輯人清水留吉、発行合名会社日本實業興信所、1912年）。

7) 『江戸東京たても園デ・ラランデ邸復元工事報告書』（2014年、p.221）。